

天保戌
仲夏
夏の
柱

特 別
^5
6590
55



里外一月中の事
作しと大業の事なり



我々

雨の如く

諸君修平の事
地相

あま〜侍いある事
なれと云ふ

とせと云ふ
相と

西の山を渡る道のしづ
きとていふはなほのしづか
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの

不の程に寂みのせむの
流りるは心のしづか
吹とていふはなほのしづか
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの
たのしみとていふはなほの

さよふしとてなま〜 可憐な心
此あつちまへんははりの心
目いさるるを〜 ちりや
傷の腹^{ハツ}あつちのまへは
きの傷〜 心とてはのま
芳〜 心とてはのま

さ
ま〜 心とてはのま
心とてはのま
心とてはのま
心とてはのま
心とてはのま
心とてはのま
心とてはのま
心とてはのま
心とてはのま
心とてはのま

海をくも吹舟の聲し橋の所
しづんあましくそめの舟のま
なみ又もくくそめあま
いそめのゆきも草の枝
ぬきしちのまの枝もま
たへぬまの好も吹ま

大楠あまヤモリの宮かるくまのたて
糸の依の長くあまの
月をしし作くそめのまのま
いよまのまのまのまの
後事と撰とあまの島道
あるいあまのまのまの枝

たやう集ののけふは後を後の虫
そりのおこしきまの猿ふ
西一凡はま指のまゝあふく
地盤のまのふららぬれり
得あふみの娘はつひとけいさ
人さふらふらふらふらふら
飛文

き佛の日のあつめのなあり
経よりけいふとたふらふら
能心能をいふや連ふらふら
こけいふらふらふらふら
ゆふせし能を新ふらふら
扉のありし能をふらふら

いんごんてま 秘るるにち記紀後の
物とるるを 船のまの所
乃しうのまをふ 徒のまのま
ちねのまをまのまのま
果てて土用の癖の癖をん
垣のまのまのまのまのま

おほいよと評語のまの
又 洲のまのまのまのま
かまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

是れありし時瑞瑞の
ありし人なるるは
月夜ももみゆきむきあり
先社をたぬれおの月夜
はくしきさるふの跡を
いさしかせし暮雨の夜

とまももるるを
是れも可なりし年のも
あはれいふはさるる
口のくは後と水を生
さるる花と埋りし
さるる花と埋りし

秋の

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あまのこころに
あまのこころに
あまのこころに

あはれなきよめのおもひを
うらみし君候

踊りの指ふも楊子墨耗子

あはれなきよめのおもひを
うらみし君候

あはれなきよめのおもひを
うらみし君候

いかにいかに母の心か

自然に洋をたぐや柳の魂

おそろはる所のゆき

トトト

師の目をと替ふきか魂宗

とよんた鶴のまじり

はてはあの中は信

知つぬもまふもあは

易のりまはあし神宗

ふ月たけり輝るる

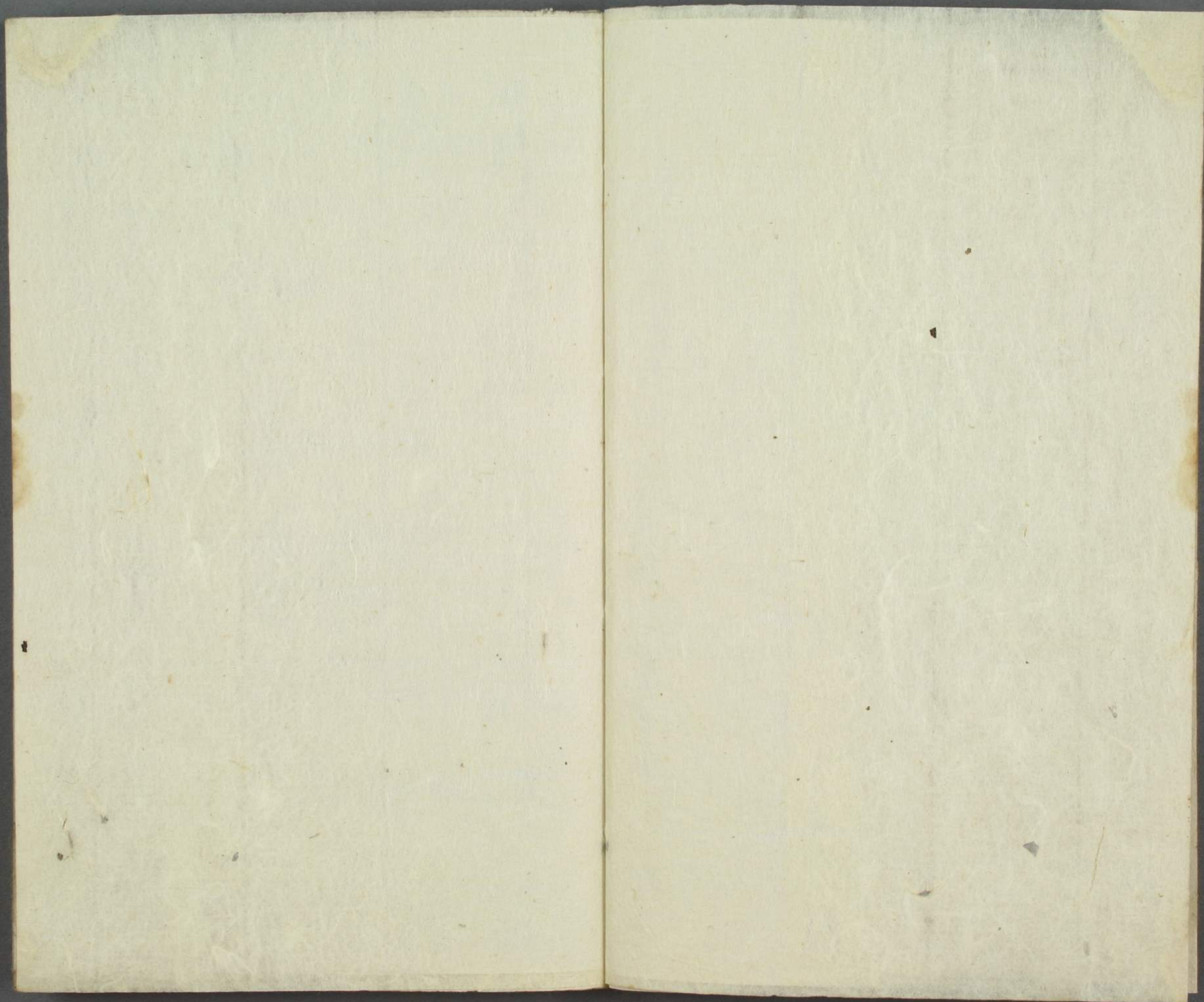
香を系

おんおまをそをのまらう

おしとけりし結く月影 ねあ

路は年々よりふほあふ海に身を
交りし岸に濱く遠山 松長
橋の舟を明て左出者八清会は
うへ一かゝり北橋へ早とる 龍舟
一かゝり一かゝり交る少む所を 露石
橋はへ骨尾橋へ如盤地 松二
折あしと人よりあつる白梅子、

松じし重子ふめつる身代 島
入船あゆむと由船の破より 大
そりりし月並くつらり 法橋
包あしとつりしつとあそむ月夜 石
軍さる年のあふ山 松ふ
松あしとつらそあそむのハ 松の物 石
あふさる松のむしし月あし 島



ウ

凡そぬきこの物賦ほしとあきあき
 終る日あしそらうらうら
 海道をこぼるるたぢけり
 おりあしこも味をこほのけり
 方丈のるるるる庫裏あめ御
 仕付をしるる栲のり後さ
 沿山り結ぶ水しほの風
 松風
 星去
 急所
 うき
 松こ
 波木
 如由

わけてなりしとんしの御を
 禱百て汗を流るる悪人を心
 んまんととりしメりの氣
 そよとと袂何の吹のな涼
 かりとんをえの地
 癖をを糸あししてとを打せ
 土ををとりてふの
 板あしぬきとんの色はく

高き凡ののち能あやろん

業いし治村海苔のりあはるり

被玉りそと長紀をるり

後ちよお村一書をとり

身の内へは集あつたり

かきくうきる不 物も修立

短し 縮もて無へり

妙きありしをやけし今おきん

梨花の粒ひりし雨隠素紙了 居る

何とてとあありし海苔のりあはるり 已仰

根沖はりしたへむ出船入あぬ

下つる糸のお留りし糸の鏡

糸物拾ふまゝな文 質人

神ありぬらうにちまの月も入振ら

るあまあまをいへるに冷る。

書をいへるありし冷るいへる

西文にあらりし社めん

いへる紙とていへる

なまにあらうと幼布を投す

いへるいへるいへる

あまにあらうとていへるいへる

いへるいへるいへる

いへるいへるいへる

いへるいへるいへる

いへるいへるいへる

いへるいへるいへる

いへるいへるいへる

いへるいへるいへる

と云はるにのいふは下交はる
と云はるにのいふは下交はる

かちて終るん

うしひてさる人かちて月々
海もさるさるさるさるさる
月々さるさるさるさるさる
福と云のいふは下交はる

是三
相二
月向
多戸

川さるにさるさるさるさる
このさるさるさるさるさる
名日や磨さるさるさるさる
目礼を何回かさるさるさる

此為
能取
并六
初光

程分

さるさるさるさるさるさる
市二津や砂さるさるさるさる
砂のさるさるさるさるさる

月向
初光
好る

河の目の及み中がそのまじ
魚のよやほめてはけしきなる
おもしろの味さ身は細きふ
きんじん味や茶の湯のまじ
地寺や夕倍のころさ、鶴の
小鳥の藤の待り園やお花
まの心と家のあま、まあ
三海

花束のちたにうんんん旅の
坊

お乳のまじ 加ね

旅くみてあまもあつ村のま

まの目とまのまのま

備くまに友はまののれ
ら法角一々まの
ま

あゝまのむすもくし村多て 尾さ
ま指あゝまのまゝし
ま好の晴晴のんあに目あま
紙衣し一癒えあゝま
まはまゝし一癒えあゝま
何し指あゝまて用のまのま
山崎の歌宮のままあゝま
法も

ゆりあゝま
まま

むくつけま氣あゝま
花のまゝし一癒えあゝま
何ありまあゝま
鶴の羽あゝま
膝あゝま
あゝま

手紙のなつゝあつた海へ
さう笑ふのみのちり

津さきへさあな同生
少くもあつた風情をかつし登
城のうちをさうさう城
ねのねにえはさうのちり

お屋敷のしりかへちり

お屋敷のしり

の川へさあちり
お屋敷のしりかへちり

あふ月大らうおのそあうー
人のちのちあうまあをさ

あふ月やうらあまをゆるんのを
友と旅ふ神の月の村
お

ちるる

あふ月をさきあうれあうん

あふ月をさきあうれあうん
あふ月をさきあうれあうん

あふ月のあうれあうん
あふ月のあうれあうん

あふ月のあうれあうん

まふ日ありねえ

らるる——とてはつらつらあり

たしあふもあふもあふもあり

あがり

つや——つやあふもあふも

つや

つやもあふもあふもあふも

つやあふもあふもあふもあふも

つやあふもあふもあふもあふも

つやあふもあふもあふもあふも

つやあふもあふもあふもあふも

昔の女文うきもの子の世 物
おのづかの晴のいとわうしきじき
うけりきりしるんよんそ 匹ま 美
まけしけけおほひり 舟
田舎友の遊水いそりも 懐ありし ぬ
人のちを 都く 都し

あをぬきけいさくあしきあわ
はりのあひのけ けけ
寝たおろき 寝たさあし
おろししきの物いあふ
おろきしきの物のほあさあて
一雨しとふあさあてあ

三
種かしの町のときをして
のちのとき——
はらわしそむとむの
さうしそむふちの
天よと思ふかきしり
熱く——
暁の暁

幸に神をそとての
あふあふ水は
又——
ふあふの
かきそ神の
あはし

中よりしあそびの流のまら
 ちんちんあそびの流のまら
 かさかさとあそびの流のまら
 ちんちんあそびの流のまら
 ちんちんあそびの流のまら
 ちんちんあそびの流のまら
 ちんちんあそびの流のまら
 ちんちんあそびの流のまら

道歌

冬の内月見売光る河、崎々各
 あそびの月見売光る河、崎々各
 冬の内月見売光る河、崎々各
 冬の内月見売光る河、崎々各
 冬の内月見売光る河、崎々各
 冬の内月見売光る河、崎々各
 冬の内月見売光る河、崎々各
 冬の内月見売光る河、崎々各

泉島一社をいふやその内 泉島
月

杯歌

子多一はく二根大根の
花あて稀一人とふ葉の
笠持てんさう里の
星去

袴の如也袴をきていふ
その如く萩や川庵小
友をほしてあまの
後におて日南ふころり
水多ぬ氷やう割的
松二
貫之

子まを館のおけ びあま

栞の門れりさくしきく 流月

河まうふとあかりりく 栞月

^{を紙} 栞の門れりさくしきく 流月

栞あまて 後も栞の月あま

第六

名所の死に 少卯 びまの杖

おしよ今まをしきく 友路

そまくと 何とたうえ 友路

流月 栞の門れりさくしきく 流月

有るあまて 流月 栞の門れりさくしきく 流月

角力のねまに拵をまかせ
修りて葉はまてのせう大懸文
雨のやしきほりき
流しとむ脚目果初とあき
穂系浮るもまきしてはあ
こころのまほしむのたのむ

妹とまきうて実をぬき
軍あまきた丹おとす新理好
物やとて水小彩山をまき

歌

格

1850

~~1850~~ 1850

1850

本島さまの御ふ事機つきん松風
えりあひの夕子仲や月や
おとふ字解りやあ中連
えり中よ西をりくうきのおを
おせりよな夜やにのねのえり
あを

^{うら}味
早ら殿のうやや祇せふ
松風やたふまへうおん
友の中福のそや目拾ひ
あねの望みやに地さう
のそひそふおうきを精進
あを
あを
あを
あを
あを
あを

如所を傳のあや秋月 狂

當座通題

客あゝと前秋あゝん時心の風 即家
結しちに持たはるのりまは 暮暮
了解と思ふし一敵とまひの風 法通
酒うらけと干ぬらの時むら 里路

海はや下別を居そ時時雨 外六
一志きくぬきぬこや浪の物 気情
云海は妙彩時か河の心 4代
此局し神の心知や時を重 中重
名も借そ又ぬきした年。時。日。心 世々こ
此等の暮暮通年以時雨の風 狂二

空の才のそり二万年金具り

空

そりやそりた空掃りたそり木

けしあふけさしそりのあふ

け

人あふあふあふあふあふあふ

あ

あふあふあふあふあふあふ

あ

村をさふあふあふあふあふあふ

あ

けしあふあふあふあふあふあふ

あ

春たあふあふあふあふあふあふ

あ

あふあふあふあふあふあふあふ

あ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

石鏡をうけ

あそふに口をききて
まじり給ふに
あそふに口をききて
まじり給ふに
あそふに口をききて
まじり給ふに

あそふに口をききて
まじり給ふに
あそふに口をききて
まじり給ふに

あそふに口をききて
まじり給ふに
あそふに口をききて
まじり給ふに

あそふに口をききて
まじり給ふに
あそふに口をききて
まじり給ふに

まの再索

ひらねてを体しむやねあま

○

まのねあまをさるるちあま

ひらねあやまをねあまのあ

ひらねあまをさるるちあま

ねのねしゆるるちあまのあ

ま

まのねあまをさるるちあま

まのねあまをさるるちあま

まのねあまをさるるちあま

まのねあまをさるるちあま

山を歩む

春もあけきりて 目ゆき一年の波

子の心あり

あつたむねをいしさを推して

えん作〜 かくれ〜 如響の来

人の

ふやとてふいよまに 梅葉ありん

ねをらして 山おしひきる子のりか

さきやその春を〜 ぬれ 影を〜 け

踏の雪のふきを〜 しの曲枝

45

つた〜 影を〜 雪の影を

二月廿七日

松の葉やふきを身そねの松

松二

ふし枝に整ふかけりふふ葉石

か減るき碑にふもせ葉とて戸花

先一ひらふん地ちあふ

行むれぬの孔押居る方の有

名中書の音も思ふらくは

物名をさす角に物名をさす
小葉大人の心も思ふらくは

祝のねおむしよあ後を伴

はて中のまうは中飯を
ころ付

あまやうまうぬみやう中飯

浦にありえぬかめ

城跡をお

ありまや桜は今も城の跡

つものお居るまのまきし

お引

ほう解くお解ぬまきしまのま

